



アクティブラーニング

教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブラーニングの方法である。(文部科学省ホームページより)

一方通行型の授業以外のものを広くアクティブラーニングと呼んでいるのが現状。

Active Learning

2020年

65%

2020年大学入試改革

これまでの「大学入試センター試験」が廃止され、①「高等学校基礎学力テスト(仮称)」と②「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」が導入されることになる2020年からの新テスト制度では、①・②のテストとも「CBT方式」での実施を前提として開発され、②の「大学入学希望者学力評価テスト」では、従来の「教科型」に加えて、教科・科目の枠を超えた思考力・判断力・表現力を評価するための「合教科・科目型」「総合型」の問題を組み合わせた出題がされ、そこでは「知識・技能を活用して、自ら課題を発見し、その解決に向けて探究し成果等を実現するための力」を評価する、PISA型の問題を想定するとされています。

また英語については②のテストにおいて、4技能(聞く、話す、読む、書く)を総合的に評価できる問題の出題(例えば記述式問題など)や民間の資格・検定試験の活用を行うとされています。

この新テストの可否は、今春の大学入試シーズン直後からマスコミでも盛んに伝えられ、関係者の間で論議されるようになっていますが、本質的な問題点は目先の制度や入試形態の変更にあるわけではありません。この新たな大学入試制度が導入される目的は、この先のグローバルな世界・社会で生きていくために求められる課題発見・問題解決の力を育てるためであり、その改革のベースにある理念は、従来の高校教育や大学入試(=日本の教育)で重視されてきた知識習得型の学力観・教育観そのものを大きく変革しようとするものであるのです。

●「CBT方式」=「Computer Based Testing」。Webに表示された試験問題に対して、コンピュータやタブレットを利用して解答する試験方式。

●「合教科・科目型」=「実社会や実生活での課題を解決するためには、個々の教科・科目の知識・技能の範囲にとどまらず、複数の教科・科目の知識・技能等を教科横断的・総合的に組み合わせることが必要」という考え方で行われる教科横断的な問題。

小学生の65%は大学卒業後、今は存在していない職業につく

キャシー・デビッドソン氏(ニューヨーク市立大学大学院センター教授)の予測によれば、「2011年にアメリカの小学校に入学した子どもたちの65%は、大学卒業後、今は存在していない職業に就く」ということです。